

**( 3 ) 健幸福寿プロジェクト  
「チームケアについて」**

かわさき訪問介護支援  
事業所チーム

集団指導講習会 「チームケア」①

指定訪問看護  
アットリハ八丁畷  
訪問看護

啓和会健康クラブ  
パレール川崎  
訪問介護

御利用者様

メデイケアセンター川崎  
福祉用具貸与

かわさき訪問介護支援事業所  
居宅介護支援

# 「チームケア」について

～かわさき健幸福寿プロジェクトに参加して～

平成30年10月29日（月）

川崎市指定介護保険事業者等集団指導講習会

：かわさき訪問介護支援事業所 ケアマネジャー 田中 早苗

【チーム事業所間での「共有」の方法】

情報共有は主に電話で行いました。サービス開始当初、Aさんは「できなくなった事」を色々と話してくれた。例えば・・・

- ・好きだったドライブができなくなった。
- ・ゴルフができなくなった。
- ・大金をはたいて買ったギターが弾けなくなった。
- ・2階の寝室の布団で寝られなくなった。

★ケアマネとしてショックだった言葉・・・「夢もチボウもなくなった」と。

⇒できなくなった色々な事を「したい事」と変換しチームで共有した。

【家族も含めたチーム各事業所としての役割分担】

P T⇒自宅の階段の上り下りや布団からの起き上がりの訓練

O T⇒指先の訓練（コップを持つ、電子レンジを使用する等）

福祉用具⇒自宅階段に手すりの設置など、環境整備

奥様⇒自主トシの促し

ケアマネ⇒連絡、調整、情報共有

【連携やかかわり方に対する工夫など】

Aさんはリハビリに積極的、奥様も上手にモチベーションが上がるよう声かけ。

目標を達成すると次の目標を御夫婦から提案してくれた。

- ・昔の仲間とカラオケをするため、電車に乗って出かける。
- ・家族で日帰り旅行に出かける、等々・・・

目標が変わるたびに、必要な訓練も変化させていった。

## 参加チームの紹介

<ご利用者様>

Aさん（男性：67歳）

御家族（奥様、次男）

<居宅介護支援>

かわさき訪問介護支援事業所

田中ケアマネジャー

<訪問看護>

指定訪問看護アットリハ

八丁畷

P T 荒井さん

O T 佐藤さん

<通所介護>

啓和会健康クラブ パレー

ル川崎 内堀さん

<福祉用具貸与>

メディケアセンター川崎

野田さん

いしん居宅介護支援  
事業所チーム

集団指導講習会 「チームケア」②

ケアーズさいわい  
訪問看護ステーション  
訪問看護

ハートケアサービス  
訪問介護

御利用者様

フランスベッド株式会社  
メデイカル川崎営業所  
福祉用具貸与

いしん居宅介護支援事業所  
居宅介護支援

## 「チームケア」について

～かわさき健幸福寿プロジェクトに参加して実践したこと、わかったこと～

いしん居宅介護支援事業所  
介護支援専門員 東 良美

### 1. チームの紹介

利用者\_\_ Kさん 女性 58歳 「小脳出血による脳幹梗塞」 要介護4

プロジェクトメンバー\_\_ ○ケアーズさいわい訪問看護ステーション

○ハートケア訪問介護サービス

○フランスベッド株式会社メディカル川崎営業所(福祉用具)

### 2. チーム事業所間の共有

- ① プロジェクトのスタート時点で、サービス担当者会議を行い利用者と事業所間で自立度を少しでも改善させるための計画を立てた。
- ② その上で、改善に向けた目標を上げて、支援者側が統一した意識を持って支援を行うようにした。
- ③ 目標は利用者の「こうしたい、これをできるようにになりたい。」を重視し、実現可能な目標を立てた。
- ④ 支援の経過においては、定期的なアセスメントを行い、課題に対しての相互の情報交換を行いつつ随時支援体制の見直しを行った。
- ⑤ 利用者のこれまでの生活スタイルを崩さず、それを尊重する姿勢で臨むようにした。

### 3. 役割分担

**本人の役割・目標：『洗濯物干しが一人でできるようになる。』**

訪問看護：室内で洗濯物を一人で干す作業の自立に向けた訓練の実施

訪問介護：自宅入浴時の介助では、なるべく見守りを増やしていくようにする。

福祉用具：ベッドや用具の点検、転倒予防の工夫や随時相談

### 4. ご本人、ご家族との関わり

今までと変わらず、自然体で接し「これまでの生活スタイルを崩さず、それを尊重する」姿勢を持ち続けること、ご本人ご家族の生活に寄り添うことを普通とした。

### 5. おわりに

ご本人は年齢が若く「自立したい。」の意識が高かったことが介護度の改善に繋がった大きな要因だった考える。また、スタート時の目標設定と統一した意識で支援していくためには担当者会議は欠かせないプロセスである。そして、それはそれぞれが専門職の役割を十分に果たしていくことに繋がることだと考える。最後に、プロジェクト参加に当たっては、気負うことなく、ご本人ご家族の毎日の様々な生活に寄り添いながら自然体で向き合うことが大切であると感じた。